

優位なものとなしている。第三には歴史的な背景である。諏訪地方の歴史は2500年前にさかのぼり出雲族と呼ばれる稲作技術をもった民族の進入は、稲作発展の重要な base となっており、「諏訪余穂」という独自の寒冷地に適する水稻品種をも作り出している。この様に稲作文化をもつ民族の定住を見たということは、他の高冷地との比較に於ても異っている。第四には県民性である。過酷な自然条件に常に研究と努力をもって対処し全国に於て此地域が最も反収をあげているという事実である。又交通の発達とも相俟って他地域との交流が盛んであり、所謂意識が進んでいた。これが製糸業発達の一因ともなり又大正時代からの商品作物導入の原因ともなっている。これら四つが此の高冷地を特徴づける因子であり又これらが組み合わさって非常に特異な高冷地の性格を現出している。

3. 省みて

卒論は4年間の集大成などと意気込み、初期の構想は雄大なものであったが、結局1年間卒論という足枷に終始振りまわされたが、読めば逃げだしたい感じに恐れ、閉じてしまうが如き論文になってしまった。いよいよ自己嫌悪に陥っている次第である。12月25日の締め切りまでの10日程は、全く苦しい闘いであった。しかしこれから研究する機会があったら卒論を手掛りとして何かやりたいと考えているだけでも収穫だったと思う。

戦後開拓地の実態の地理学的考察

— 愛知県豊橋開拓地の場合 —

永 田 悦 子

開拓地は、高冷地開拓と低暖地開拓の二大別が可能であるが、戦後開拓地の特色は、旧軍用地の跡地利用による、都市近郊で交通に恵まれた開拓地があり、戦後にまで残された悪条件の地域とはその性格を異にする。

豊橋開拓地は豊橋市に属し、南部の(明治以降、第二次大戦終了まで陸軍演習場であった)洪積台地、天伯原、高師原上に位置する標高63m~11m、3000haの広域である。本論文はこの典型的な低暖地・都市近郊開拓地の実態の考察を目的とし、地域性の把握に重点をおいた。当開拓地の性格を規定するものは大別して自然条件、人文条件であるが、戦後開拓事業の性格の果す役割が大である為、本論の構成は次の如く、行った。

第一章 調査地域概説

§1 地理的位置

§ 2 自然地理的環境（地形，気候等）

§ 3 人文地理的環境（豊橋市の都市性格，交通）

第二章 戦後開拓地の実態

§ 1 戦後開拓事業について（開拓政策，開拓事業地域）

§ 2 豊橋開拓地の実態（概説，発展過程，営農実績）

§ 3 四町農協地区の実態（高師原，岩西，天泊原，大着水地区）

§ 1 東三河総合開発

§ 2 新状況への対応

§ 3 要約

以上

当開拓地の地形を述べるに際し，明確を期す為，洪積台地周辺の山地，沖積地を含めた地形調査地域を設定した。洪積台地は上位（天泊原に該当），中位（高師原に該当），低位の三台地面に分けられるが，開拓地立地の重要条件であるから，更に細分し，上位面では緩傾斜面，中位面では，低生産性の腐植土（通称フロボク）分布地を抽出した。又，谷底平野は，沖積谷底と上位台地を刻む侵蝕谷底に分け，合せて九地形面に分類した。地形発達史に關しては基本的な点で二説が対立し，細かい点では種々の意見があるが，一説をとる事は能力を超えている事と，本論文に占める比重は小さい事から，両説を述べるに留めた。土壌は，開墾以前には成育不良の笹及び松に一面おわれた，強酸性，腐植欠乏，有効磷酸欠乏の赤褐色又は黄褐色の洪積土壌で，この土壌改良こそ，当開拓地成功の基礎条件であったが，徹底した指導体制の下で，地理的位置を生かし，都市塵芥を貨車で集めたり，計画的施肥により，全国有数の成功開拓地となったのである。今一つの悪条件は走水性であり，麦類，甘薯作の畑作経営に限定されていたが，東三河総合開発の一環である，豊川農業用水が昭和39年完成予定で，蔬菜栽培への動きが強い。人文環境としては，特に豊橋市の都市性格に重点をおいた。即ち，宿場町→城下町→城下町→軍事都市→産業文化都市の変遷を経て，将来は臨海工業都市に変わろうとしている，変遷の激しい豊橋市の一部を占める当開拓地は，豊橋市変貌の一過程に他ならないのであり，開拓地存否の鍵はこの点にあるといっても過言ではない。歴史，産業及びこれらの総合的な意味で土地利用の観点から述べた。

一方，当開拓地は，北海道を除いた国内唯一の大集団開拓地であり，開拓指導所のもとに徹底した経営が行われ，戦後開拓事業の性格を強く反映して

いる。戦後ノ7年，社会情勢の変化につれ，開拓政策も，失業者救済，食糧自給に始まり，今日では，農業基本法による，酪農・果樹栽培などの奨励と，およそ五期の変化が認められ，当地の発展過程もその波の上にある。しかし，営農への直接的影響は，入植と同時に結成された開拓農業組合の力が強く，ノ5農協が単位となり，各地区を構成している。自然条件，交通，農協の指導力の有無，組合員の前職等が作用して，各地区のその性格を異にし，戦後同時に始まって開拓も，この相異により，将来の方が分化すると考えられる。本論文では四地区をとりあげた。「高師原地区」一軍人出身者80%と全地区中最も高率である。又，市街地に最も近接し，都市化が進み，土地の転売，転貸が多く，兼業率は高く，開農協の有名無実もあって，開拓地としての性格は最も失われている。唯，企業的な10000羽単位の養鶏専業が一部では，成功している。「岩西地区」一組合員の45%は分村計画による入植者で，従来の主穀から蔬菜への脱皮の際，他地区にはない団結力を生かして協業経営，協業出荷を徹底し，冬季北西風を生かした大根加工（豊橋沃産）は，昭和33年，大阪市場で第一位の販売高を占めるに到り，他作物にもその成果が上がっている。「天伯原地区」一起伏に富む上位台地面に位置する為谷頭を利用した水田が全地区中最も多く，水田率12%である。開農協の指導力は強く，種々の職業の出身者の集合である事を考慮し，主穀農業からの脱皮に際し，幾つかの形態を奨励し，各戸の選択に委ねている。集団酪農をノ2農家が試験的に行っており，将来は養鶏，養豚も集団化されると予想される。「大清水地区」一開農協の力は弱く，主穀農業の域を出していない。経営面積は，四地区中最も多く，兼業率も低いが，営農は一般に不振である。これは，工場敷地として有利な飛行場跡である為，土地転売への期待が大きい事にも原因している。

以上の様に内部的には相異があるが，当開拓地の性格は，要約すれば，不良土壌の克服を基盤とし，麦類及び甘藷作中心の畑作農業に安定した道を求めてきたが，近年，温暖な気候を利用した蔬菜園芸，あるいは，都市近郊の条件を生かした酪農，養豚，養鶏へと脱皮しつつある。そして，大集団開拓地の徹底した指導体制もあいまって，全国開拓地でも高水準の地位を占める。しかし，一方では，豊橋市の中にあつて，敗戦直後の市の復興基盤となった当用拓地は，将来，新産業都市建設（臨海工業都市）としての変貌過程にあつて，その存続は危くなっている。

将来，当開拓地は開拓地としての性格を喪失するであろう。それには，近き将来としては，既存農家に租し，農耕地としての存続する方向（四地区を

は岩西、天怡原地区が該当すると思われる)と農耕地そのものの性格を失い、他産業に利用される方向(高師原、大清水地区)がある。そして、更に遠い将来に於いては、開拓地という一過程を経た、内陸工業地帯と化すであろう。

他開拓地との比較を行えなかったので漸定はできないが、低暖地、都市近郊の開拓地として、その要素を非常に敏感に反映している、地域ではなかるか？

中種子糖業の地理学的考察

板 垣 若 葉

卒業論文の *field* の決定に際しては、かねてから、一度調査を行いたいと希望していた島嶼を取り上げ、それも未知のものを求める興味心から、東京からなるべく離れた、それでいて交通事情も特別に悪くない種子島を選定した。春休みに、南九州一周旅行をかねて、種子島の予備巡検を行ったが、その時は、私の郷里を振り出しにし、また南種子を *field* にした菊川さんの郷里熊本に中継したこともあって、それほど遠いとは感じなかった。しかし、夏休み、いよいよ本格的な現地調査に出発する段になると、もう一度来ることを期待できない精神的緊張と、時期的にも台風シーズンの始まる直前であったことから、現地への出発が億劫にも、また重荷にも感じられないこともなかった。このように、*field* 地域が再調査の不可能な遠距離にあることは最初から覚悟はしていたものの、結果的にみると、その調査にあたってはかなりの *handicap* を持っていたこととは否めない。もともと現地調査に十分馴れていない *undergraduate* の段階においては、一度の現地調査で全て調べつくせるものと考えたこと事体大きな誤りであり、9月、10月以降、遅まきながら、ようやく問題意識が芽生えてきた時には資料不足に悩まざるをえないという羽目に陥ったのである。このような事実からも、私の論文は糖業の概論的色彩が濃く、現地を十分に反映させた、中種子の糖業の地域性を把握するという地理の主目的を達成するまでに至らなかったのは、まことに遺憾のきざりである。

しかし、反面、必ずしも学問的とは云い難いのはあるが、何処でも飛び歩ける度胸が付き、また、島嶼の生活を実際に海を渡って体験を通して知り得たことは、些が無謀ではあったが、貴重な、また楽しい思い出としていつまでも残されることと思われる。

中種子は種子島の中央部に位置し、面積140 km²、人口20,300人、東亞